

いずみだ かずひろ  
泉田 和洋

電機連合・書記長

「他は是れ吾にあらず、さらに、  
いずれの時をか待たん」  
～道元禅師に学ぶ仕事と時間に向き合う姿勢～

新年明けましておめでとうございます。皆様にはご家族の皆様ともども、希望に満ちた新年をお迎えになられましたことと、心よりお慶び申し上げます。

さて、今年の干支は「子」ということで、十二支の第一番目の干支に当たることから、新年を迎えるにあたっての気持ちも、いつもより少し引き締めなければと思っております。その気持ちをもって、最近のエピソードから、「仕事と時間に向き合う姿勢」についてのお話をさせていただき、新年のご挨拶に代えさせていただきます。

話は昨年のことになりますが、ある研修会に講師として招かれた時のことです。講演の後、公務員の方から次のような質問をいただきました。それは、「私は、行政機構改革推進の仕事をするようになりました。その役割を果たそうと頑張るつもりですが、公務員は、その成り立ちから、いくら頑張っても利益が出るわけではありませんので、どうしても個々人の仕事に対するモチベーションを上げることが、難しいしいことを実感しております。そういう状況の中で、どのようにしてモチベーションを上げていけば良いか、是非、教えていただきたい」という内容のものでした。

折りしも、社会保険庁の年金をめぐる皆さんが社会的問題として取り上げられていた時期でしたから、質問した方の表情は極めて真剣でした。

大変、難しい質問でしたが、その時、私の頭に浮かんできたのが、時々思い出しては、自分自身の戒めにしている、永平寺（曹洞宗）を興した道元禅師の「典座教訓」でした。

道元は、24歳の若さで修行のために宋に渡ります。典座教訓は、その道元と、宋の年老いた典座（台所の長にあたる僧）とのやり取りが語り継がれたもので、意識すると次のようになります。

道元が宋の港に着いて、暫くした時のことでした。日本から来た船に、しいたけが積んであるという事で、年老いた典座が、片道五、六里の道を歩いてしいたけを買いに来ました。道元としては、初めて見るかの国の僧から、いろいろと聞きたいことがありましたので、食事をご馳走しますからゆっくり話でもしていきませんかと言います。そして、台所の仕事を軽く見た道元が、台所の仕事なんて、あなた一人がいなくとも差し支えないでしょうと言います。すると、老典座が、私は、この道に入って四十年になるが、ようやくにしてこの職に就くことを得た。この仕事は私の修行そのものである。明日は、一山の大家にご馳走をしたいと思って、この船まで来た。明日の供養はどうしても私が司らなければならないのですぐ戻ると言い、道元に向かって、あなたはまだ、仏道の修行が何であるやら、経典の文字が何を意味するやらご存じないとみえるという言葉を残して、急いで帰って行ってしまいます。

後に道元は、この僧と再会し、「仕事に軽重



はないことと仕事に向き合う姿勢」、また、「有限である時間の大切さと仕事に向き合う姿勢」を悟ったといわれています。

このいきさつが、「他は是れ吾にあらず、さらに、何れの時をか待たん（自分に与えられた仕事は自分がやらないで誰がやる。また、有限である私たちの一生という時間を考えれば、時間は一瞬たりとも無駄にできない。今やらないでいつやるというのか）」という言葉として残されています。

説明が長くなりましたが、私はこの話をさせていただいた後に、質問者の方に、「まさに仕事に軽い重いはなく、皆様の仕事は利益が上がらない仕事と言われますが、公務員の皆さんが、効率・能率、さらには相手に喜んでもらえるサービスというものに心がけて仕事をしていただくという事は、回りまわって税の軽減につながるものであるし、そのことは、国民、そして国家に対しての立派な貢献だと思う。逆に、やってもやらなくとも給料は変わらないとか、利益が上がる訳ではないからという事で、仕事や時間をおろそかにすれば、その人の人生がその分おろそかなものになってしまうのではないのでしょうか」と答えました。そして、「モチベーションを上げるためには、まず褒めることが大切だと思います。最近の上司の一部には、人を褒めるどころか、

先行きを見通せないことにいらだって、気持ち的に余裕がなく、文句や愚痴が多い人が見受けられるような気がいたします。まず褒めることに努めてみて下さい」と付け加えました。

質問に対する答えになっていたかどうかは疑問でしたが、講演が終わると、その質問者の方が私の所に来てくれました。そして、「実は私の実家は、まさに曹洞宗のお寺でして、私も道元禅師のことは良く勉強しました。でも、その教えと私たちの仕事は別物と考えていましたのが、今日からは少し近づけて考えるようにしてみます」と明るい声で言ってくれました。

私たちは、「あらゆる所、これ、すなわち道場ということですね（教えというものは、お寺や修養道場の中だけで実践するものではなく、日常生活の場を全て道場と思って実践すべきであるという意味）」と、握手をして別れました。

「他は是れ吾にあらず、さらに、何れの時をか待たん」。今年もこの言葉をかみしめて、「一人ひとりの幸せづくり」に取り組んでいきたいと思えます。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。